

自由経済研究

Jiyuu Keizai Kenkyuu(Study of Free Economy)

シルビオ・ゲゼルの貨幣的ユーピア

ヴィクセルとケインズの間にある、ある異端説の事例

C.E.R.S. --- エクス・マルセイユ大学 ミシェル・エルラン

森野 栄一 訳

(自由経済研究 4、第四号、1996年3月刊、所収)

シルビオ・ゲゼルの貨幣的ユートピア---ウィクセルとケインズの間にある、ある異端説の事例

C.E.R.S.---エクス・マルセイユ大学 ミシェル・エルラン
森野 栄一 訳
(「自由経済研究」、第四号、1996年3月刊、所収)

(本論文はリシャール・アレナとドミニク・トーレがニース・ソフィア アンティボリス大学の協力を得て編纂した『ケインズと新ケインズ主義者たち』と題する論文集 (Arena, Richard et Torre, Dominique éd., Keynes et les nouveaux keynesiens, Paris:P.U.F., 1992.) に所収のミシェル・エルランの論文 (L'UTOPIE MONETAIRE DE S. GESELL UN CAS D'HÉTÉRODOXIE ENTRE WICKSELL ET KEYNES) を訳出したものである。ウィクセルとゲゼル、ケインズ三者の理論的関連を明らかにしている本論文は三者のそれぞれの理論を把握するうえで、三者が相互に基準となりあうという関係を明確にしておき、興味深い。ゲゼルの経済理論の絶対値を知るうえでも、まずこうした一つの潮流のなかでそれぞれに偏差を示す三者を相互の関連を押しえながらとらえる研究がまず必要であることを教えてくれる論文である。)

「ケインズは、経済学者たちが幾度も反駁を繰り返したインフレ主義者の幻想の寄せ集めに新たな何らの観念をも付け加えてはいない。彼のテーゼは、貨幣的ないかさま師として拒否されたシルヴィオ・ゲゼルのような彼の先行者たちのそれ以上に矛盾しており、一貫してさえない」 ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス (1966年、834頁)

I この引用は疑いもなく注目すべきものである。1966年、それは『人間の行動』の第三版が刊行された年であるが、依然としてケインズ主義の無傷の名声はこうした直接的な攻撃をきわめて無作法なものとした。そのうえ、多くの経済学者たちには、ケインズの上にゲゼルを置く必要などありもしなかった。こうした状況であったので、ゲゼルをケインズに関連づけることは、ケインズ自身がゲゼルを紹介するのに『一般理論』で5頁も充てていることから、完全に正当である。これほどに明々白々な称賛は注意を引くにちがいないはずであるのに、だが反対に、このことがどれほどの注目も引かなかったことには驚かされる。思想史家たちのなかでは、H・デニスガ

例外であるが、それはケインズが分別（あるいは誠実さ）以上のものを見せていないことを残念がっているためである。デニスによれば、ケインズは「彼の体系の主要な観念を」アメリカの経済学者ヨハンセン（1844-1928）から「借用」しており、このことを十分に明示していない。デニスはこう付け加えている。「このことは、現代のいちばん著名な経済学者が『ダグラス少佐』や『シルヴィオ・ゲゼル』のような二流の著述家の功績を称えるのに数多くの頁を割いているだけにますます残念なことである」（1966年、539頁）。

シルヴィオ・ゲゼルに言及した数少ない経済学者たちは一般に1、2行しか彼には与えていない（2）。例外は、ゆっくりとしたペースで受け継がれた事項に関連しており、ケインズとブルードンを結び付けるのにゲゼルを役立てるというものである。実のところこれはディラードとリストの考え方である。前者のダッドレイ・D・ディラードは今日、1954年にはやくも、《生産の貨幣的経済》の様式をいちやく導いたことで知られるが、彼の博士論文は「ブルードン、ゲゼル、ケインズ」を扱っている。この論文の出現以来、ゲゼルは彼を取り囲む荘重なる二つの人格の間にあるつましい媒介者の役割をもたされるようになったように見える。

「『一般理論』のケインズが今日、当時ブルードンが占めた位置とよく似た位置にいるという仮説にとりわけ興味を引かれる。社会改革の歴史のなかでは恐らくそれほど大きな重要性を見せていないゲゼルはこれら二者を結び付けるものとしてなによりも興味をもたれる」（6頁）。

この点については、ディラードが博士論文の後で、単に「ケインズとブルードン」（1942）と題した論文を著わしたが、このほうが重要である。

1955年にシャルル・リストは「ルヴュ・ディストワール・エコノミク・エ・ソシアル」（経済・社会史評論）でブルードンを扱った論文を発表した。その時、リストは死去したばかりであり、この論文を自分の知的な遺書と捉えていたと受け取られた（4）。これは、マルセル・リヴィエール書肆が計画したブルードン全集の中の『株式取引所相場師提要』（5）の序に使われるはずであった。リストのこのテキストは1960年代のマルクス主義の潮流の噴出にいたるフランス学派を特徴づける不寛容を申し分なく示している。マルクスについては、リストはよく知られた『小史』（6）のなかでヴィリイとの完全な一致を強調している（「マルクスは経済学者ではないし、けっしてそうではなかった。彼のテーゼは経済的に矛盾している」などなど。リスト、1955、130頁）。この不寛容は同じくゲゼルにも向けられるが、この点に関して、リストの態度は大多数の経済学者のそれと違いはない。「ケインズ卿がこのような愚論（ゲゼルの理論）をまじめに取り上げる気になったことは彼の使う意味でのユーモアに敬意を払わせはするが、彼の読者にとっては彼が下した評価が無価値であることを証明している」（1955、133頁）。つまるところ、リストによって拒否されたのはゲゼルの理論ばかりでなく、ブルードンのそれも同様なのであり、したがっ

て、ケインズの理論もまた、彼にとって「ケインズの理論はブルードンの理念の更新でしかない」がゆえに、拒否されるのである。そしてこの二者を対照させているパラグラフで彼はこう結論している。

「80年の期間を隔てたブルードンの理念のかかる更新は、時間と空間を通して持続する貨幣的ユートピアの数々のうちの一例である」(1955、132頁)。

II 「ユートピア」、この素晴らしい言葉が発せられた。それも軽々しくにだ。なぜならリストは同じブルードンの「交換銀行」の計画案と利子率の低下を狙ったケインズの勧告に立脚しているからである。そうであるのであれば、ケインズにこうした改革の計画のために「貨幣的ユートピア」というレッテルをはるのは少しも正しくはない。ケインズはゲゼルが着想した改革案をむなしくも、とりわけ『一般理論』で擁護したのである。ブルードンとゲゼルとケインズは三者とも貨幣的ユートピストである。それはこの表現が一つの意味をもつためには同時に必要であると思われる二つの理由からである。

---まず、彼らの改革案は達成されなかった。それらは、その実現性に関する説得力ある検証を満足させるために十分な規模で、どれも決して実験されはしなかった。

---それに、各論者は、経済の作用の改善ばかりか、根本的な社会の転換を期待しており、また、彼らの一人ひとりにとって明白であるのは、---ケインズの表現を使えば---「金利生活者の安楽死」である。

「ユートピスト」はひとつの事実である。「異説を唱える者(hérétique)」はもう一つの事実である。ケインズがこの言葉を好んだことは知られており、これを、『貨幣論』でも『一般理論』でも使っている。これらの著作のうち前者では、次ぎのような仕方で「異説」という言葉で彼が理解することを説明している。

「ほとんどすべての貨幣的異説には共通するある要素が存在する。それらの貨幣及び信用理論は類似しているが、それは、それらが、ある点では、銀行がすべての資金を提供すると仮定しているためであり、この資金は工業や商業が実質的な費用なしに当然のこととして要求しうるものである」(1930、II、194頁)。

1936年の著作では、「異説を唱える者」なるカテゴリーはかなり拡大されている。なぜなら23章の末尾に書かれているところでは、それはマンデヴィル、マルサス、ゲゼル、ホブソン、それに(補助的に)ダグラス大佐に拡大されているからである。しかし、『貨幣論』では、ケインズは異説を唱える者を、科学の周辺にいる「奇説家たち(CRANKS)」といわれる人間たちと同一視している(1930、II、193頁)。『一般理論』では「CRANK」という言葉はゲゼルについてのみ使われているのである。ジャン・ド・ラルジャンタイエは「精神異常者」という言葉で率直にこれを翻訳した(「その他の大学の経済学者と同様われわれも、非常に独創的な彼の[ゲゼルの]努力が、精神異常者の著作として以上の注意を払うに値しないと考える」193

6、367頁)。

結局、「異説を唱える者」は1936年に、ケインズにとって「異端者」(hétérodoxe)と同義となった。異端者とは、正統派と対立し、これに取って代わりその地位を奪おうとするものである。また成功するためには、異端者は新たな正統派を打ち立てざるをえない。この点については、ケインズは明らかにサクセスストーリーをなしとげたヒーローであり、これに対しゲゼルは、彼の提案が二つの大戦に挟まれた期間にかなり多数の聴衆に出会ったとはいえ、失墜したヒーローである。

III ここではわれわれがすでに別の場所で言及した(エルラン、1977、1991)ブルードン---ゲゼル---ケインズの系譜を取り上げない。その代わりに、ゲゼルの「非常に独創的な努力」と忘却のなかにあった彼の「鋭い洞察力のもつ明敏さ」に立ち返ることが有用であることに疑いの余地はない。「奇妙な予言者」(ケインズ、1936、366頁)は埋もれたままなのである。彼の著作の重要性を明確にし、彼が貨幣理論にもたらしたものを評価するためには、少なくとも二つの指標が必要である。一つはその著作に先立ち、その新しさの判定を可能とするもの、もう一つはその著作の後で、残されたものの評価を可能とするものである。このような場合、後者の指標となるのは明らかにケインズである。この尺度で測ると、ゲゼルの挫折は考えられているものよりもささいなものとなろう。たしかに、「ゲゼル主義」は存在しないし、「自由貨幣」の経験は束の間のものであった。それでも彼の貨幣理論はその本質的部分でケインズの著作のなかで生きつづけている。

前者の点については、多くの議論がヴィクセルについてなされる。このスウェーデンの経済学者はなによりもまず、ゲゼルの時代に支配的な新古典派のなかでもっとも卓越した貨幣の専門家ではなかったのか。また、ドイツ語圏の人間であるゲゼルがその主要著作を書いたとき、ドイツ語を使えたヴィクセルの著作を知っていた。実際、『自然的経済秩序』(1911)のなかで、『価値、資本、地代、新たな国民経済理論に向けて』(ドイツ語原著、1892)と『貨幣利子と財の価格』(ドイツ語原著、1898)を引用している。

さらに、ヴィクセルが、ゲゼルとケインズが事実上共通に参照したほとんど唯一のものであることが分かる。ゲゼルは政治経済学では独学の人である。彼は1891年にプエノスアイレスで刊行した著作で確立した貨幣についての計画を提起している(『社会的国家への架橋としての貨幣改革』)。したがって、『自然的経済秩序』は彼に課されたこの計画の事後的な理論化となっている。事情のしからしめるところから、ゲゼルが引用する経済学者は少なく、(ブルードンは別にすれば)ヴィクセルが、原理上、肯定的に引用されていることは明白である。彼らのお気に入りの批判対象がベーム・バベルクとマルクスであったからである。

ケインズについていえば、彼はヴィクセルの『利子と価格』を知っていた。この著

作については彼は『貨幣論』では何度も、そして『一般理論』では二度もほのめかしている。年長者に対してケンブリッジの長が負っているものを明確にするのは難しい。ケインズの言うところを信用すれば、彼は、十分理解できなかった（「ドイツ語で、私はただ自分がすでに知っていることしかはっきりと理解できなかった！---新たな理念は言葉上の困難によって私にはまったく隠されていた」1930、I、178頁）。ところで、『利子と価格』の英訳はR・カーンの手で1936年にようやく刊行されており、『政治経済学教程』はそれより少し早く1934年に第一巻が、1935年に第二巻が刊行されている。しかし、ケインズはもっと容易にヴィクセルの考えを知っていた。まず、ヴィクセルが1907年に「エコノミックジャーナル」に発表した簡潔な論文によって（この雑誌はケインズが1911年から1945年まで編集していた）、また、ギュスターヴ・カッセルが『社会経済学の理論』で行った解釈を通して、である。この著作の英訳は1923年であるのだ。つまり、『貨幣論』（第一巻、177頁）で、ヴィクセルの『利子と価格』のカッセルによる紹介を議論しているケインズを見るのは奇妙なことである。ケインズはおそらく自分の言語上の能力について謙遜しすぎである。

『貨幣論』において、つねにケインズは利子率が価格に与える間接的なメカニズムに関連して、ヴィクセルの先行性を認めている。

「私がヴィクセルの考察の深さを誇張したのか、あるいはそうではないのか、いずれにしても、この著者がはじめて、物価水準に対する利子率の影響が投資率に対するその影響の結果であり、この文脈での投資が投機ではなく投資に大いに意味をもっていることをはっきりと示したのである」（1930、I、177頁）。

このように説明された、歴史的順序に関するこの説明にはいかにほどの知的負債の再認識も含まれてはいない。窮余の一策として、もはや「驚異の十年間の」シャックルの饗宴での幾人かの演者たちにたよるほかない。彼らはケインズの理論体系の構成に関して信ずるに足る証言をもっている。彼らのなかでは、もちろん、リチャード・カーンの証言がもっとも信用するにたるものの一つである。

「ケインズに対するその（ヴィクセル）の影響は自然利子率と市場利子率の間の区別のケインズによる適用以上のものであると彼はいつているが、これは疑わしい」（1984、74頁）。

IV ケインズがヴィクセルの著作から引き出した着想が正確にはなんであれ、この両者が発展させた理論の間の根本での類縁性には異議を差し挟みにくい。『一般理論』がヴィクセルとの関係や『貨幣論』のケインズとはっきりと断絶しているとするれば、このことは本質的に、変異の大きさが連鎖の端で説明されねばならないような相違を強調することになる。

---貨幣 利子 『利子と価格』と『貨幣論』における価格、

---貨幣 利子 『雇用、利子、貨幣の一般理論』における雇用。しかしながら、ヴィクセル自身は、彼の体系の概略を要約してみていくことで分かるが、貨幣の実質的な影響に関心をもっていた。

貨幣利子率（あるいは市場利子率）についてのヴィクセルの定義は困難を引き起こしはしない。それは単に銀行が要求する（平均）率である。対照的に、彼は実質利子率の定義に躊躇する。『利子と価格』のなかで、彼は「いかなる用途も貨幣ではなされず、その貸付けが実質的な資本財の形態で実行される場合に、需給で決定される」利子率を「自然」利子率と呼んでいる（102頁）。それから、貨幣を欠いた経済で支配的であるそれを貨幣経済の状況に関連づけるのが困難なので、自然利子率とは混同されず、自然利子率によって決定されながら、他方で、価格を変動させないような利子率の水準に一致する「正常」利子率を導入する。さらに彼はこれを次のように明確化している。

「正確であるためには、われわれは意図的に、安定した価格の維持が貨幣利子率と自然利子率が等しいことを要求すると述べることを避けなければならない。実際上、それはどちらとも決めがたいものであるよりはむしろ、完全に別の二種の概念である。なぜなら、問題は平均水準にあるのであり、それらの正確な決定は、理論の次元でさえ、大きな困難を惹起するからである。特別な定義のもとでは、この二つの率の絶対的な同等性を語ることは正確であろう。別の定義に従えば、問題となるであろうことは、貨幣利子率に対する自然利子率の一定の超過であり、これは避けがたい企業のリスクなどに一致する」（120頁）。

ヴィクセルは『政治経済学教程』の第二巻で自分の理論の解説をしている。そこで彼は資本の予想収益性として、つまり、まさしくケインズが「資本の限界効率」と呼んだものとして自然利子率を定義している。その後の論文で、彼は投下資本の「限界生産性」に依存する投下資本の「実現された利潤」の率とこれを同一視する変更をくわえている（1907、214頁）。その一連の変更があるにしても、ヴィクセル自身によれば、「その本質的な点は、一定した価格水準の維持が、その他の事情にして等しければ、一定した貸付け利子率の維持に依存しており、この率とその実効率との間の乖離が価格に対する前進的で累積的な影響を与えるということである」（1898、120-121頁）。

事実、例えば貨幣利子率が正常利率より低い場合には何が起こるであろうか。なによりも、ヴィクセルは当時のすべての経済学者と同様に、貯蓄が利子率の増加関数であると考えた。銀行金利の低下は金融上の投資収益と結び付いており、貯蓄は減少し、消費需要を押し上げる。他方で、投資収益は融資コストの低下で増加し、企業家は投資目的の借入れを行う気になり、投資財への需要が増加する。したがって、投資財と消費財の価格の高騰が同時に起こるであろうし、この高騰は以前であれば処分可能であった一部の生産要因が、今後、資本財の生産に悪影響を与えるだけにますます進む。

こうした二種類の高騰にはその諸要因の価格の高騰が伴うので、最終的には、企業には取引量の増加とそのコストの増加が同時に起こり、その結果、利子の低下に起因する「特別利潤」は維持されうるであろう。

むしろヴィクセルの解釈は批判を免れるわけではない。例えば、彼が描きあげるこのプロセスが彼が主張するように際限もなく続けられうることを、彼は論証しようとさえしていない。しかしながら、ヴィクセルの著作はマクロ経済理論になるであろう理論の素描を申し分なく提供しているがゆえに、もっとも注目すべきものの一つである。消費と投資は、貨幣市場と労働市場のように二大部門なのである。30年代の偉大なマクロ経済学者たちはこの足跡を辿っていくほかなかったし、特に、スウェーデン学派の彼以外の二人の卓越した代表者、ミュルダールとオーリンはそうである。もちろん、英国ではケインズがそうである。

さらに次のことを付け加えるべきである。ヴィクセルは価格変動を説明することに止まってはいないということである。彼はまた利子率の低下が生産と雇用に対して持つ影響も認識していたし、「第一次近似」においてそれが無視されうることさえ付け加えているのである。

「しかしながら、価格の高騰が、一定の尺度のなかで、生産の増加によって、例えば、それに先立って失業が存在するとか、あるいは高賃金が労働時間の面で引き伸ばされたりとか、貸付け利率の低下の当然の帰結であるいっそう資本家的な生産のためにとかで、はばまれることが排除されてはならない」(1906、195頁)。

ヴィクセルが探求したのは不均衡の主要な二原因である。まず、実質利子率の自然発生的変化は貨幣利子率を直接に、また完全に調節する機会をほとんどもたない銀行によって誤解されている。また、インフレは単に、貨幣利子率の低下が期待されなくても、実質利率が増加するがゆえに高進していくことが可能で、これはトゥークがリカードに向けた異議にこたえるものである(したがって、また利子率が高騰したときにもインフレが見られ、これはケインズが『貨幣論』で「ギブスのパラドックス」と呼んだものである)。次に、銀行の貴金属準備が増加した場合、銀行はより多くの銀行券の発行を企て、これを実行するために、貸付け利率を引き下げ、これがまた新たなインフレを引き起こすであろう、といものだ。この後者の例はジャン・ボードン以来今日まで経済学文献に一貫して現れる。貨幣の研究は国際関係の理解なしには行い得ない。まず、貨幣には「外的強制」がのしかかる。ヴィクセルの時代に行われていた金本位制の体制においては、彼の説くところでは、いかなる貨幣政策も金備蓄による妨害の結果デフレを避けることができない。これを防ぐためには、貴金属貨幣に対する紙幣の比率を高めるために、また成長する経済のなかでその流通速度を維持するため利子率の引き下げが必要である。しかし、これはこのような政策を採用する国から金を急速に流出させることになる。このことが意味しているのは、世界的な水準で、一方では、かなり困難で、とにかくも、不十分ではあっても、こうした企てを行うべ

きであるということだ。「なぜなら、役に立たない硬直的な銀行立法を緩和するだけでさえ、増えつづける工業用の金需要は斬新的に銀行の金備蓄を減らすであろうし、ほかならぬ金価格の高騰すなわち一般物価水準の低下を阻止しうるであろう」(1907、218頁)。こうした理由から、ヴィクセルは純粋な信用貨幣を勧告している。彼によれば、それが唯一の「合理的システム」である。「それなら、ともかくも貨幣価値を安定させること、また価格の平均的水準を常に維持することよりなる問題、そして明らかに貨幣の科学の基本問題とみなされねばならない問題は理論においても実践においても解決されうるであろう」(同書、218-219頁)。こうした条件にあっては、あらゆる諸国が同じ目的を追求するならば、各種の国民通貨の間の為替レートの安定性は金本位制によるのと同じように保証されうるであろう。

ヴィクセルの理論の歩みと『貨幣論』におけるケインズの理論との間の類縁性ないしあらゆるケースでの類似性は当然のこととして幾度も強調されたので、ここでそれに立ち入る必要はない。ヴィクセルの結論と『一般理論』のそれと間にかなり注目すべき類似性(これはより以前に書かれた著作に従えば、それほど驚くにあたらない)が存在することを示すほうがより興味深いのはもちろんである。ケインズの二大著作の間の相違は大部分、そのそれぞれにおいて、説明されるべき変数に与えられた強調にある。事実、ケインズが研究した大量の失業が存在し、(したがって)生産の弾力性が高い状況でヴィクセルのモデルを機能させるならば、『一般理論』と同じように、貨幣利子率の低下の帰結として価格よりむしろ高度の作用水準と雇用を予見することができる。そして、外的制約を抽象するならば、常に、『一般理論』におけるように、利子率に対する行動は景気安定の政策の正常な用具となる!もちろん、ケインズには(貯蓄が利子率よりも所得に依存すると仮定する)支出乗数に基づいた景気刺激の第二のバルブがある。これはあらゆる貨幣政策の外部で実行されうるものであるが、比較をあまりに遠くにまで押し遣ることになろう。

V ゲゼルもまた、ヴィクセルの弟子---こういうのは極端であろうが---としてではないにしても、すくなくともヴィクセルの概念装置と推論の帰結を自らのものとした人物として現れた。それにここでは、ゲゼルが特定のこれこれの点でヴィクセルから着想をえたということは、はっきり言って難しい。まず、この二人の著者がなるほどいかなる影響も相互に予想していないということによって、彼らが同時に思い起こされる今日的な事例や事実がある。すなわち、彼らは、オーストリアの銀行券に対して、その価値が(流通紙券量のコントロールによって)長い間その銀平価を上回っていたことをそれとなく指摘しており、また、彼らはドイツの1億2000万の金マルクの戦時債券を嘲笑しながら考察している(9)。

これらの事例とは別に、ヴィクセルとゲゼルには、われわれが自身の責任で再び主張するであろうがゆえにわれわれには「現代的」に見えるテーゼが見つけれられる。し

かしそれがヴィクセル自身の著作よりも以前からあるものであることもはっきりしている。したがって、紙券と銀行預金の貨幣的特質は彼に先立つて認められる。むしろ、ヴィクセルはクナップが『貨幣の国家主義理論』(1905)のなかで「名目論」の流行に言及せず、ジョン・ローにも遡らなかったのにそれより早く自分の体系を作り上げた。ヴィクセルはもちろんジョン・ローを知らなかった。彼は銀行学派の支持者の見解をよく知っていたのである。

この二人の著者はそれぞれ自分流の仕方で、――このことは上で述べたことと補完的であるが――金の圧制を告発し、貴金属から完全に解放された純粋な信用貨幣を支持する立場をとった。金に対する批判は歴史的に大変古いものである。なぜならゲゼルが指摘しているように(1911、99頁)、すでにスパルタでは、リクリュゴスが金や銀の硬貨を廃止していた。そして問題となるエピソードが今日より以前の9世紀に流布されたとみなされている!スパルタの神秘的な立法家からケインズまで[金は「野蛮な聖遺物である」1923、138頁]、金に対する破門制裁はそのための追求があまり行われなかったが決して止むことはなかった(10)。こうした次元での情動の混乱は心理分析家がこの問題を捉えているが、この点についてケインズは『貨幣論』の「Auri sacra fames(金の呪われた喝望)」と題されたパラグラフ(II、258頁)を参照するように強く指示している。経済学者のなかでは、ブルードンがもちろん貴金属を非難する点では第一級であり、これをどこかで「独占の守護神」と呼んでいる(1846、86頁)。ゲゼルが豊富に引用したブルードンは少なくとも一度、ヴィクセルによっても引用されている(1906、190頁)。

われわれが取り上げている著者たちが古代の伝統を継承していることを検証するのは嫌気がさすであろう。ただ補足的に二つの例を提供しておこう。一つは貨幣価値に関連している。『利子と価格』の第二章と『自然的経済秩序』の第三部の数多くの頁は貨幣価値が商品のタームでの購買力と混同され、それ自体が逆に価格の指数に還元されることを論証することに充てられている。この二人が貨幣を評価する方法が、現実には、一つではなく二つ存在することを指摘することから始めていることはよく知られているし、もちろんそれは好ましいものであった。チュルゴーはこのことを『省察』の第76パラグラフの見出しの部分で非常に明快に述べている。

「通商においては、銀に二種の異なった評価がある。すなわち、一つは様々な種類の商品を獲得する代わりに与える銀の量を表現する。もう一つは通商の流れに従って手に入る利子に対して銀の額が持つ関係を表現する」(1766、168頁)。

このような指摘はヴィクセルとゲゼルが貨幣利子率を扱う場所ではとりわけ当を得たものであった。

ヴィクセルとゲゼル、ケインズに共通する理論的核心は実質利子率と貨幣利子率との区別である。さらに、このことがすでにスコラ学者によって言い表されており、ボードンやボアギュベール、ロックなどによって使われていることから、古代の観念が

問題でもある。経済学において、何であれ考え出すことは決定的に困難である。すでに存在するすべてがこうした意味での結論に至らしめる。それゆえ、ヴィクセルの天分は分析上の正確さのなかに求められねばならない。発見した仮説のなかにではなくむしろ結論の厳密性のなかにである。さらにつけ加えておくべきは、ヴィクセルはその時代を支えたということ、また、ワルラス以前よりも以後のほうが分析的、かつ厳密であることが容易であったということである(12)。

VI ゲゼルは貨幣利子率を三つの要素に分解する。すなわち、基礎利子、危険のプレミアム、高騰のプレミアムである。後の二つは、「高騰のプレミアム」が期限がくるまでのインフレ率に等しいこと(1911、350頁)がわかれば、さして難しいものではない。「基礎利子」(Urzins)あるいはいわゆる貨幣利子が残るが、ゲゼルは本質的な区別が「貴金属貨幣の利子」と「実物財の利子」との間に存在すること(312頁)を指摘することに気を使っている。

ヴィクセルにおける基本利子と類似しているところはなにもない。ゲゼルがこれを「貢租」と呼ぶように、これはブルードンの「濫用権」の息子であり、ケインズの「流動性プレミアム」の父である。それでも、ゲゼルがブルードンとの類縁性を知っており、ケインズがゲゼルとの類縁性を知っていたとするならば、反対に、彼らは両者ともはっきりと否定するということになる。

ゲゼル

「本書の著者はブルードンが従ったのと同じ道に導かれ、同様の結論にたどり着いた。彼はブルードンの思想を完全には知らなかったのである」(7頁)。

ケインズ

「しばしば不完全に分析された理念の場合にそうなるように、その(ゲゼルの理念の)重要性は、われわれが自分たち自身の手段をもって個人的な結論に達したとき以外には明瞭には分からないものである」(1936、367頁)。

先行するものがあるにもかかわらず、ゲゼルは、貢租の起源を説明するために、ブルードンの定式に訴え、それは『自然的経済秩序』の各所で繰り返し現れる。すなわち、「貴金属貨幣は市場の錠前、差し錠である」。貴金属貨幣は一方で、他の財に対する優位性をもっている。それはそれが優れて流動性のある財であるからである。他方、それをもってすればすべてを購入することができる。ゲゼルによれば、それはなによりも、それが破壊されないのに、それと交換されねばならない財のほうは、一般に、急速に腐敗するか貯蔵に費用がかかるからである。したがって、交換においては、一方は(販売者は)、他方が(購買者が)損害を被ることなく時期を待つことができるのに、プレッシャーを受ける。すなわち「商品の所有者は貨幣の保有者のなすがままである」(172頁)。したがって、通貨を保有する者はそれが利子やそれ以外の形態の貢租をもたらす場合しか支出することに同意しないであろう。

ゲゼルが自分の貢祖の法則から引き出した第一の結論は、そう呼ぶことができれば、利子率には関連してはいないが、価格水準には関連している。事実、貢祖は権利の買い主によって追求されるばかりか、商品の買い主によっても求められる。したがって購入は、商品Mに対して金額Aを前払いする買い手が再販売することでより多い金額A'を得ようとする限り、数限りないであろう。そういうことだから、マルクスの定式A-M-A'は彼が提起した「媒介者の長い連鎖」を経る必要はないにしても正当化される。マルクスが主張したのとは対照的に、ゲゼルにとって、貨幣は「等価物」ではない(300頁)が、「当初から資本」(203頁)である。こうした観点では、インフレは直接的に事業に好影響をもたらすものであり、このドイツの経済学者はインフレ率が5%に達した(184頁)とき蓄財はゼロになると見積もっている。反対に、貨幣流通を減速させるには価格下落の兆候で十分である。すなわち「金属貨幣は伝統的な貢祖がもはや保証されなくなるとストライキに入る」(174頁)。

利子率は貸し手先取した貢祖の特別な形態である。彼らは商品の買い手以上のプレッシャーをその貨幣の処分から受けないのである。たしかに、貸し手はどんな貢祖も要求できるわけではない。なぜなら、それがあまりに高い場合には、貨幣代用物(物々交換や手形)の活用が発展するであろうからである。歴史を急ぎ概覧した後で、ゲゼルは基礎利子が変わることなく、3から4%の間で維持されていると結論している。

VII その「貨幣保有」の理論は、いくらか素朴で、見た所、先フロイト主義的であるが、ゲゼルやブルードンのような「変わり者」によってのみ説かれたわけではない。経済思想の歴史はポアギュベールやマルクス、ケインズを称賛してはいるが、彼らもまたその擁護者であった。当然、各人は自分独自の仕方これを表現し、活用している。孤高の存在であったゲゼルは、関連しあう完全な体系を発展させるには至らなかったが、新古典派の正統派の教えとは明確な対照をなす結論を手にしてはいる。それはまさに、ヴィクセルによって見直され、修正されたものなのである。

標準的な新古典派の貨幣理論は---もしその中傷者におけるのとは別のなにか似通ったものがあるとするなら---いわゆる貨幣数量説のもとに現れる。ヴィクセルはこれを扱った章で、「実質現金手持高効果」(14)を援用しながら、その働きを説明している。彼が探求している仮説は財の価格の上昇、ただしこれはどの財にとっても均等であるが、それと、とりわけ貨幣の総量である。当時、彼はこう書いている。「現金手持高は新たな価格水準との関連で漸進的にかなり効果を減じられたものとなる」(1898、39頁)。したがって、各経済主体はみな、その需要を減らすか、財の供給を増やすかすることで、その手持現金を増やさざるをえない。グローバルな水準で見ると、各経済主体は、少なくとも名目的には貨幣ストックを増加させることに成功しないであろう。反対に、財の市場に超過供給が現れることで、価格は変更をこうむることとなり、それは、この著者に従えば、(明言されていないが、実質的に見た)手持現金

が新たに「適当」と判断されるまで下落していくであろう。ゲゼルが、一般物価水準ではなく投資利率に回答するなかで同じタイプの効果を発見したことに留意しておくのは興味深い。もし投資利率が低下するならば、この著者は資本家はその収入を維持するような仕方（伝統的な理論が教えるのと同じように）より多く貯蓄する気になるであろうことを認めている。このことから、資本ストックの増加が新たな利率の低下に結び付き、そして同様に、利率の低下がそのさらなる低下をはくむことになる。

「利率が低下するほどに、資本家は収入のうち新たな実質資本の産出や資本費用に充てるべき部分を増やすことになり、これがまた利子を低下させる傾向をもたらすのである。」

実質利子に關説したこの引用を誤解すべきではない。なぜならゲゼルによれば、このことは、それが貨幣利子に支配されるという意味で自律的なわけではないからである。

「貨幣が年5%の利益を商品で上げるなら、それが貸し家や船荷を運ぶ船舶、賃金労働者の働く工場のいずれによって利子を強要しえたにしてもどうでもよいとなろう。さもなければ、貨幣は単に商品のなかで市場に止まったままであるし、なにも作り出しはしないであろう。」

ゲゼルは推論を進めていくが、それは、「基礎利子が実質資本がそれを巡って変動する均衡の中心である」という自分のテーゼを論証するためである。実質利率が（例えば諸国の人口の過剰によって）基本的な（貨幣）利率を上回ると仮定してみよう。この場合、実質利率の高騰は貯蓄を刺激するし、新たに、資本ストックの増加が収益率を低下させることになるであろう。

「実質資本利子が基礎利子上回って高騰することが、新たな建物を作り出すような持続的で、自動的な成長を自然に、かつ強力に開始させる。近接した時の経過のなかで、重りは再び下降し、財の利子は均衡点、つまり基礎利率へと低下し、そして反対に再び上昇するまで自動的に下落していくであろう。」

したがって、ゲゼルにとっての貯蓄の役割は全く非定型である。なぜなら先の二つの事例において、前者のケースで実質利子が低下し、後者のケースでは上昇するのに貯蓄は増加するとみなされているからである。

ゲゼルの理論においては、資本蓄積は、あらゆる投資が少なくとも基礎利率に等しい収益をもたらす必要があるということから、人為的に抑制される。そして『自然的

『経済秩序』の著者は、経済が利子率を低下させるであろう貨幣供給の増加によって刺激されうることを考慮しないのである。彼は反対のことさえ考える。すなわち、「貨幣流通の増大は利子率を低下させもするが、上昇させもする」と。彼が「ギブソンのパラドックス」に与えた説明はインフレ率と貨幣ストックの増加の役割、名目利子の間のフィッシャーが与えた関係に根拠を置いている。

ゲゼルにとって、(危険のプレミアムと予測されるインフレから演繹された)貨幣利子率は基礎利子として固定された3%の下限以下には低下しえないものである。

「基礎利子は、交換手段としての貨幣の使用が、物々交換や原始的経済のような貨幣の代替制度を使うことよりも優位していることに対応している。いかなる貨幣供給もこの相違を消滅させることはできないし、したがって利子を廃止することもできない。」

確かに、「現存の貨幣」の不都合を「発行を改革するだけ」で緩和することを想像しうる。国家はどのような流通上の偶発的な危機をも払いのけるために必要と考えられる率で、国家の統制のもとにある銀行を媒介として貸付けを企てる。ゲゼルはこうした政策には好意的ではなかった。彼はその帰結を詳細に描き上げている。

「しかしながら、次第に顕著となる利子の下落は、常に、より多くの預金者に貯蓄金庫への足を遠ざけさせることとなる。また、やがて多くの預金者は、もはや、わざわざ銀行に貨幣を預けるほどもないと考えるようになる。とりわけ、短期日内に流動性を必要としない場合にも、銀行は敬遠され、無視される。人々は自分の貨幣を他者の監督のもとに置くよりは自ら安全に保有しようとする。率が上昇すれば対重をなすのであるが、それに対するこのような障害がどれも、今後、優勢となっていく。通貨つまり銀行券は、発券銀行から湧き出て、無数の預金箱を経て市場を流れる。発券銀行の石版刷りの印刷は持続的に貴金属貨幣の代わりとなり、それは市場から引き上げられていく。こうした一覽払い手形へのとてつもない需要量は本当は待避へ向かう道へと向きを変えることである。

利子が低下すればするほど貨幣の流れは増大する。利子が1%にまで下落し、市場に実質資本が飽和しているにもかかわらず、預金者は何でも貯蓄金庫に預けようとはしない。だれもが自分の金を自分自身で監督するほうを選ぶ。一国の貯蓄総額は個人の手元にある資産となる。」

長すぎる引用にも利点が認められる非常に喚起力のある描写のなかで、ゲゼルがどのように記述している状況はまさしく、経済学の文献では「流動性の罨」の名で知られているものである。それは消滅貨幣の計画の主要な正当化を構成している。消滅貨

幣は正当なものである。なぜなら単なる貨幣発行の改革では（手元にある貨幣が大量に流通に再び投ぜられるという仮説において）余りに危険であることは明らかだからであり、さらに先まで進み貨幣そのものを改革する必要があるのである。そして、ケインズはこの改革に彼もまた流動性の罨を考えたがゆえに同意した。消滅貨幣の適用は、貨幣需要の弾力性が無限であるような「ケインズ主義的」といわれる事例における貨幣政策の効率性を再確立することを可能とする。

すでに別の場所で詳細に説明したので再び取り上げはしないが、修正されたゲゼル-ケインズのソリューションは貨幣に対して課税することよりなり、それはこの罨に一致する最低水準にまで利子率を低下させることを可能にする。例えば、完全雇用の限界効率が1%に等しく、流動性の罨が利子率 $r = 2\%$ で始まると仮定する。あらゆる経済主体は貨幣を2%より低い率でも貨幣保有のほうを好み、貨幣の「流動性プレミアム」(p)は、貨幣の機会費用に等しいが、2%である。1%の率を作り出すことで、課税される流動性プレミアムの純額 p' つまり $2\% - 1\% = 1\%$ が回復されるであろうし、それゆえ経済主体は $r = 1\%$ までで、 $r > p'$ である限り貸付ける気になるであろう。

本論文は時代の最も傑出した経済学者であるヴィクセルとその貨幣に対する理念に对比させながら貨幣理論に対するゲゼルの貢献を評価しようとするものであった。ケインズは別の「無視できない」基準を構成してはいるが、我々には、彼のテーゼのもつ人気そのものがそれが広範に暗黙のうちにあることを十分に正統化しているように見える。

このことを思い起こしたあとで、場合によって近い遠いの程度の差はあるけれども、ここで呼び集めた三人の著者の間の類縁性がただ理論的種類のものだけではないことを強調することが残っている。『一般理論』でケインズはゲゼルを「反マルクス主義の社会主義者」と表現している。リンダールはヴィクセル生誕百年を記念して書いた論文のなかで、「社会 - 急進主義を大量にに含んだリベラル」(1951年、33頁)とヴィクセルを特徴づけている。ケインズに関しては、彼は「完璧ではないリベラル(アングロサクソンの意味で。仏語ではラディカル)」として自己を表現するのを常とした。実際これらのすべての表現はほとんど同じことを指し示している。三人の経済学者は自由が経済的効率性の主要な条件であると考えていたがゆえに、反マルクス主義者であった。このことはもちろん偶然ではない。ケインズは「マンチェスター学派」を称賛するために『一般理論』の最終章でゲゼルを新たに引用しているのだから。

「ゲゼルとともに、我々は古典派理論の欠陥の是正は『マンチェスター学派』を放棄することにはならず、生産の可能性が十全に実現されうるために、単に経済行動の自由な発揮を要求する環境を指し示していると考えよう。(1936年、393頁 またゲゼル、1911年、XIV頁)

ヴィクセルは、(トラストやカルテルという)企業の間、あるいは(組合という)個人間の自由な同意に好意的である範囲において、このような位置との関係では若干後退しているように思われる。

多少とも濃淡のある経済的自由主義の側面では、この三者は今日でもなお、しばしば革命的と受け取られる社会的諸方策を擁護した(17)。例えば、彼らは三者ともネオ・マルサス主義者である。この観念は、ゲゼルの場合には(1911年、XI頁)、優生学への率直なシンパシーを伴っている。利率に関しては、ゲゼルは貨幣の「貢租」をすぐにでも無くそうと望んだし、これを経済的にも危険で、道徳的にも受け入れられないと考えたのである。ケインズは金利生活者の安楽死が長期には不可避であると考えていた(1936年、389頁)。ヴィクセルに関していえば(1906年、190頁)、ブルードンの「無償信用」に関心をもって探求した。他面で、彼らは一般物価水準を安定化する使命を通貨政策に与えることで預金者に好意的であった。税の領域では、彼らは三者とも機会の平等を打ち立てるため高課税、とくに相続税に好意的であった。ヴィクセルはダグラス少佐の「社会的分配分」を予測させる社会的遺産の観念を擁護した。彼が25歳のとき考えたことは、あらゆる市民がその人生を始めることができるよう小額の資本を、その死に際して同額を返還するとの条件で、受け取るべきであるというものであった。ゲゼルは土地国有化の支持者であり、また、土地の位置より生まれる賃料が「母親の子供の養育費として子供の数に比例して母親たちの間で配分される」(1911年、XVII頁)ことを望んだ。

このような理念とともに、ヴィクセルやケインズ自身が、その同時代人の目からみて、ゲゼルが我々からみてそうであるように、風変わりに見える時期を過ごしたということは驚くべきほどのことでもない。そのうえ、ゲゼルだけがひとり三者のなかで牢獄に囚われたわけではない。ヴィクセルは、社会党の本拠地のあるストックホルムの会議で聖母の無原罪のドグマにあえて疑いを挟み2か月間投獄された。そしてケインズは第一次大戦後、『平和の経済的帰結』で世論に逆らい物議をかもした。・・・なによりも時代の、そして世代の変遷とともに、偉大な人間たちは、その存命中には欠けていた尊厳を獲得していくものである。

注

(1) ヨハンセンの名は『貨幣論』(第二巻、90頁)で、「真理にもっとも近づいた」「アマチュアの経済学者」として好意的に引用されている。

(2) ハロッド(1951年、547頁)もデルフォー(1977年、121頁)もそうである。

(3) また、ブラジルの経済学者、S. フェルナンデスにならって、この連鎖をポアギューバルにまで遡ることもできる。

(4) オブマン、1982年、998頁を参照のこと。

(5) 実際、出版業者のガルニエがブルードンに注文したこの株式取引所相場師提要はデュシェーヌがその大部分を書き上げた。初め、無署名で刊行され、1857年の第三版からブルードンの著作に加えられることになった。

(6) 『偉大な経済教義小史』は最近(1985年)再編集されたが、不可解なことだ。

(7) 科学上の革命の計略家としては大部分をケインズの個人的資質によるといわねばならない。エルラン、1988年参照。

(8) これは銀行に対して、発行した紙券のかなりの部分を準備金として金の形態で保有するよう迫るものである。實際上、一方では、通貨システムでの金のかたちでの準備は完全になくなるわけではないし、また他方では、その規制は緩和されるものである。そうはいつても19世紀に長期のデフレの時期があったことに変わりはない。

(9) さらに、ヴィクセルに関連して、この例がスウェーデンで刊行された著作(1904年、59頁、1906年、123頁)にもみつけることができ、ゲゼルがその著作を書いていたときには翻訳されていなかったことを強調しておきべきであろう。

(10) ゲゼルがいつも引用するゲーテ(99頁)によれば、「金に執着し、とにかく万人は金に向かってはせき立てられる--ああ、アーメン」である。

(11) この表現はすでにマカロック(『政治経済学原理』、1830年)で使われており、マルクスが再び取り上げている(1867年、699頁)。

(12) G. H. ボスケが次のように書いた時、誰を念頭においていたのであろうか。「ワルラスの理念の基礎に立って理論的反复を繰り返したあるスカジナビアの経済学者の名をあえて引用しはしないが、ここで引用することさえできるだろう」。ヴィクセルにはクラレンスの賢者のさまざまなりフレインを参照することはほとんど問題ではありえなかったのである。

(13) この点に関して、マルクスとケインズの間類似性を明らかにしておこう。エルラン、1983年。

(14) パティンキンも名称を与えている。1965年。

(15) ケインズが拒否した解釈。1930年、II、177頁以下。

(16) 『自然的経済秩序』第三部の副題。

(17) そのうえ「労働党の大部分の選挙人以上に保守主義者ではない」と自負していたのはケインズである。1926年、246頁。

Bibliographie

- BOUSQUET G.H.(1934): <<Léon Walras et son temps (1834-1934)>>, Journal des Economistes, 15 décembre.
- DELFAUD P.(1977): Keynes et le keynesianisme, coll.<<Que sais-je?>>, Paris, P.U.F.
- DENIS H.(1966): Histoire de la pensée économique, coll. <<Thémis>>, Paris, P.U.F.
- DILLARD D.D.(1940): Proudhon, Gesell and Keynes. An Investigation of some <<anti-marxian socialists>> antecedents of Keynes' General Theory of employment, interest and money, Ph. D. dissertation, Univ. of California, Berkeley.
- DILLARD D.D.(1942): <<Keynes and Proudhon>>, The Journal of Economic History, Mai.
- FERNANDES S.(1967): Ouro--a reliquia barbara, Rio de Janeiro, Editora Fundo de Cultura.
- FERNANDES S.(1973): <<l'or et l'actualité de Boisguilbert pour la France et le monde>>, les Annales de l'Economie Collective, Janvier-Mars.
- GESELL S.(1911): L'Orre économique naturel, 1911; traduction française de la 8e édition, Paris, Marcel Rivière, 1948.
- HARROD R.(1951): The life of John Maynard Keynes, 1951; Harmondsworth, Pelican, 1972.
- HAUBTMANN P.(1972): Pierre-Joseph Proudhon. Sa vie et sa pensée, Paris, Beauchesne.
- HERLAND M.(1977): <<Perpetuum mobile et crédit gratuit. Deux propositions oubliées pour améliorer le fonctionnement d'une économie monétaire>>, Revue Economique, Novembre.
- HERLAND M.(1983): <<Keynes et Marx 1883: l'un arrive et l'autre part>>, Les Temps Modernes, mars 1983 ; repris dans Problèmes économiques, no 1836, 18 août 1983.
- HERLAND M.(1988): <<La stratégie révolutionnaire de Keynes>>, Revue Française d'Economie, Printemps.
- HERLAND M.(1991): Keynes et la macroéconomie, Paris, Economica.
- KAHN R.(1984): The Making of Keynes' General Theory, Raffaele Mattioli Lectures, Cambridge, Cambridge University Press.
- KEYNES J.M.(1923): A Tract on monetary reform, 1923; <<The collected writings of John Maynard Keynes>>, Londres, Macmillan et St Martin's Press, 1971.
- KEYNES J.M.(1923): <<Liberalism and Labour>>, The Nation and Athenaeum, 20 février 1926; The New Republic, 28 octobre 1926; repris dans les Essais de persuasion.
- KEYNES J.M.(1930): A Treatise on money. I - The pure theory of money. II - The applied theory of money, 1930; <<The collected writings of John Maynard Keynes>>, Londres, Macmillan et Cambridge, Cambridge University Press, 2 vol., 1979.
- KEYNES J.M.(1931): Essais de persuasion, 1931; Paris, Gallimard, 1933.
- KEYNES J.M.(1936): Théorie générale de l'emploi, de l'intérêt et de la monnaie, 1936; col.<<Bibliothèque politique et économique>>, Paris, Payot, 1968.

- LINDAHL E.(1951): <<Till hundraarsminnet av Knut Wicksells födelse>>, Ekonomisk Tidskrift, 1951; trad. angl. dans Wicksell(1958).
- MARX K.(1867): Le Capital, vol. I, 1867; repris dans Oeuvres, Economie, vol. I, coll. <<Bibliothèque de la Pléiade>>, Paris, Gallimard, 1965.
- MISES L.V.(1966): L'action humaine, 3e éd., 1966; coll. <<Libre échange>>, Paris, P.U.F., 1985.
- PATINKIN D.(1965): Money, Interest and Prices. An integration of monetary and value theory, 2e ed., New York, Harper and Row.
- PROUDHON P.J.(1846): Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère, 1846; Paris, A. Lacroix, Verboeckhoven et Cie, 1867.
- RIST C.(1955): <<La pensée économique de Proudhon>>, Revue d'histoire économique et sociale, no 2.
- TURGOT A.R.(1766):<<Réflexions sur la formation et la distribution des richesses, 1766; repris dans Ecrits économiques, col. <<Perspectives de l'économie>>, Paris, Calmann-Lévy, 1970.
- Wicksell K.(1898): Interest and Prices. A study of the causes regulating the value of money, 1898; trad. ang. 1936; coll. <<Reprints of economic classics>>, New York, Augustus M. Kelley, 1965.
- WICKSELL K.(1906): Lectures on political economy. Vol. II - Money, 1906; Londres, Routledge and Kegan Paul ltd., 1935.
- WICKSELL K.(1907): <<The influence of the rate of interest on prices>>, The Economic Journal, juin.
- WICKSELL K.(1958): Selected Papers on economic theory, 1958; col. <<Reprints of economic classics>>, New York, Augustus M. Kelley, 1969.